様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｈ０７２４７

研究課題名（和文）上方漫才からみる戦後日本における大衆と知識人に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociolgical research of relationship between Masses and Intellectual in postwar Japan focused on 'Kamigata Manzai'

研究代表者
後藤　美緒（GOTOH, Mio）

日本大学・文理学部・助手

研究者番号：６０７７９９３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、大衆演芸の一つである上方漫才に着目し、そこに書き込まれたローカル・アイデンティティに定位しながら、1930～1970 年代を中心に記述・分析し、その作業を通して、近代日本における大衆と知識人の関係性を検討した。
　本研究の主要な成果は次の三点である。（1）資料の利活用法の提案と、放送局の独自性を抽出（2）漫才とラジオとの親和性と漫才の成立過程の解明（3）放送や雑誌を通して大衆と向き合う知識人の実態を解明した。

研究成果の概要（英文）：This research focus on Kamigata Manzai and analyzes the local identity of it from 1930’s to 1970’s, then analyzes the relationship between masses and Intellectuals in modern Japan.
The main result of this research are the following three points. Firstly, new usage suggestion of broadcast document archives and thereby tries to extraction the originality of broadcast stations around japan. Secondly, explore the compatibility with radio and Manzai, and formative process of the modern Manzai. Thirdly, finds reality that intellectuals met masses through radio and magazins.

研究分野：歴史社会学、知識人論、大衆文化論

キーワード：上方漫才　ラジオ放送　知識人　占領期　戦間期

１．研究開始当初の背景

2014 年 6 月、文部科学大臣による「国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて」の通知により、国立大学での「文系学部」の廃止などが言及された。近代学校制度がはじまり、そのあいだに二度の教育の大衆化を経験して 150 年近く経た現在、高等教育機関の機能やそこで究明される学問的価値が改めて問われるが、社会学ではそうした言説の成立過程の解明や機能の歴史的検討による大学の再定義が強く要請されている（吉見 2016）。だが同時に、教育の大衆化がすすんだ日本において、娯楽といった学術的成果とは一見、距離のある分野の検討も必要だろう。なぜなら、教育の大衆化は大衆文化の高尚化と裏表の関係にあるからである。

そこで本研究は京阪神を中心に発展してきた上方漫才に着目する。後述するように、上方漫才の成立には教育の大衆化のみならず、メディア・テクノロジーの発達や権利意識の上昇といった近現代日本の歴史的経験のなかで生きた人びとの関与なしにはありえなかったからである。

２．研究の目的

本研究の目的は、上方漫才を対象として、漫才に書き込まれたローカル・アイデンティティに定位しながら、1930～1970 年代を中心に記述・分析することで、「啓蒙／消費／地域」といった領域区分が創出・再編成される過程を明らかにすることである。その作業を通して戦後日本における、演芸や放送を通じた大衆と知識人の関係を考察する。後発的で、下層の大衆芸能とみなされた上方漫才は、近代メディアとの接触がカテゴリーの成立と高尚化に成功したことが指摘されており、漫才作家たちに着目することで、その娯楽的側面のみならず、大衆と知識人の関連が示唆される領域として位置づけられる。上方漫才への知識人の関与を基軸に歴史的にふりかえることでいまいちど、人々の生活をメディアや地域の複合的な重なりとしてとらえることが可能になる。

３．研究の方法

研究成果の蓄積をより豊富化すると同時に議論に活かすために、つぎの三つの視角および文献と聞き取という二つの調査法にもとづき研究を進めていった。

（1）メディア・テクノロジーの展開と上方漫才の編成

近代に起源を持つとされる上方漫才は、芸能史から 1900 年初頭のメディア・テクノロジーの発展が芸の形態を左右したことを指摘されている。だが、どのメディア・テクノロジーの、いかなる要素が影響したのか、また誰が関わったのかは十分に検討されていない。したがって、本研究では、上方漫才が積極的にメディアに接触した 1930 年代以降における上方漫才の展開を新聞・雑誌、ラジオ、テレビに腑分けして明らかにした。

（2）上方漫才にあらわれるローカル・アイデンティティ

プリント・キャピタリズムを分析した B・アンダーソンは、近代のメディア・テクノロジーの発達が、物理的な距離をこえて見知らぬ人びと相互を共同体の一員として認識させたと指摘する。だが、本研究が究明する上方漫才は、かならずしもナショナルな共同体創出の側面だけでないことが指摘できる。1930 年代に人気を博す漫才師ミス・ワカナと玉松一郎のコンビが戦地で演じた漫才「ワカナの放浪記」では、京阪神の地名とことばがふんだんにもちいられた。今日、この表現方法こそが上方漫才の特質と認識されている。この作品を創作したのが、旧制高校・帝大に在籍した秋田実という漫才作家である。これはローカルな共同体の萌芽がナショナルを想起させる回路に現れること、かつその始原が戦間期に求められることを示唆し、文化創出と共同性をめぐる力学の検討をうながす。ゆえに、上方漫才に書き込まれたローカル・アイデンティティを具体的に検討する必要がある。とくに、作品内の方言の使用や視聴者からの反応を抽出し、分析した。

（3）上方漫才の成立――「啓蒙・消費・地域」の再編成と知識人の関与

上記（1）（2）は、上方漫才が、メディアと芸の相互作用によって新たな文化を作り出し、人びとを魅了するものであったことを示すものである。ゆえに、秩序の安定を目指す国家は統制したが、商機を求める人びとにとっては財の創出資源であり、また漫才の作り手たちにとっては地域を資源にしたあらたな秩序形成のよりどころであった。本研究では、そうした上方漫才をめぐる言説を検討して行くことで、「啓蒙／消費／地域」といった諸々の領域区分が創出され、再編成されていく過程と戦後知識人の態度を明らかにした。

また、上記の分析視角を生かすには、資料の調査・収集が不可欠であり、文献調査と聞き取り調査を実施して、資料の調査・収集に努めた。以下に詳述する。

まず、文献調査については、次の四種の文献を集中的に収集した。①上方漫才をふくむ諸演芸の興行や、放送に関する所管官庁の行政文書、②放送技術に関する記事や論考、③個別の漫才作家および番組の漫才台本、音源、映像作品。④上方漫才について言及している文書・演芸雑誌、文学作品。このため、放送や演芸の資料が集中している東京と大阪で資料調査をおこない、可能な限り多く複写・収集した。

調査は東京（国会図書館、早稲田大学演劇博物館、法政大学図書館、NHK 放送博物館）、大阪（大阪府立図書館、大阪府立図書館国際

児童文学館、大阪府立上方演芸資料館、関西大学）でおこなった。特記すべきこととして調査の途上で、NHK 放送博物館での継続的な調査が可能になり、日々の放送記録である番組確定表や人事異動関連書類の閲覧が可能になった。

また、漫才作家の遺族への聞き取りプレ調査をおこなった。

こうして得られた資料の中から、個別の作家に焦点を当て、事例研究を展開した。

４．研究成果

資料の収集・分析を通じて明らかになったことは学会報告での個人報告のほか、ワークショップの企画や招待講演、ホームページの開設などによって広く公表に努めた。その具体的な内容は下記のとおりである。

（1）資料の利活用方法の提案と放送局の独自性への示唆

話芸である上方漫才は口承芸術であるため、文字化された記録が少ない。また、しばしば、メディア・テクノロジーとの接近が芸の定型化・近代化に寄与したと指摘されるが、記録媒体が高価で使いまわされた（上書きされて用いられた）ことや保管に際する物理的制約によって資料も限定されている。そのため、資料の問題を解決することが研究の前提であった。本研究ではこの問題を解決するために、従来から用いられている資料に対して新たな視点で検討することを提案した。この対象となったのが番組確定票である。

番組確定票は、一日に放送された番組の放送時間や番組名、出演者が、放送局職員によって記録される、放送の一日の記録である。これは、時局で発信・番組発信をおこなう東京と大阪のそれぞれで、ラジオ放送開始の1925 年から現在まで残されている。

かかる資料の性質上、番組確定表は、従来、放送の事実を確認するために用いられてきた。しかし、通史的閲覧という観点で検討するとき、時代ごとにどのようなトピックが選ばれ、番組として成立したのか、いわば放送ジャンルの成立と展開、衰退が判る資料とも位置づけられる。

一日ごとの放送時間の変化を追うと、放送初期の 1925 年は朝と昼と夕方に数時間ずつの放送で、放送開始・終了時間もあいまいだったものが、徐々に 1 時間や 30 分を単位とした番組が作られていき、放送における空白の時間が少なくなっていった。また、時報のほか、語学番組が早朝に、料理番組が午前中に設定されて定時放送化されていることが確認できた。以上のことから、放送が近代的な時間感覚をつくっていく様を推察できた。さらに、東京と大阪の番組確定票の比較（定点観測および記述内容）では、同一時間において各局が別番組を放送していることが確認でき、個別の番組によって個別性を模索していることが判明した。とりわけ大阪放送局からは待演芸（落語、漫才）が積極的に選ばれていることが判明した。

いずれも従来の番組確定票の用いられ方とは異なる視点であり、資料的価値の新たな発見と位置付けられる。資料の活用法と、そこから見いだされる放送局の独自性の検討に関しては、ワークショップを企画し（学会報告③、雑誌論文①）、フロアを交えて検討した。

なお、本点については今後も、方法論として精緻化することを課題とする。

（2）漫才の定型化とラジオとの親和性

上方漫才の近代化・定型化にはメディア・テクノロジーの発展が不可欠であったことが指摘されているが、実証的な研究は行われていない。そこで上述した番組確定票の通史的閲覧をおこない、放送番組のなかでマンザイと発音された演芸がどのような字で表現されたか戦間期の変遷を追い、当時のメディアや放送制度にかかるテクノロジーの関連性、またそこにかかわった製作者の意図を検討した。すなわち、ラジオ放送草創期の 1920 年代後半ではマンザイの放送は見られず、1933 年頃よりその表記が現れる。その際の表記は萬歳・万歳・万才であった。しかし、1933 年末より漫才の表記が現れ、1934 年になるとその数が圧倒的に増加して、以後、漫才の表記が安定する。とりわけ大阪の番組確定表には、手書きの追記事項が散見され、それによると、1933 年末に漫才への表記が変わった際に台本製作者であったのが、旧制高校・帝大に在籍した秋田実という人物であったことが確認できた。

戦前のラジオ放送は、スタッフや制作ノウハウが十分に蓄積されておらず、その欠を充足する必要があった。さらにまた、こうした番組制作技術上の制約のみならず、制度上の制約（放送内容）もあり、従来のコンテンツを生かしながら、時局にある程度適合した番組づくりが求められた。従来の演芸作品は、コンテンツを提供することができるものの一方で、寄席とは異なる上演テクノロジーが必要となるため、調整が必要である。

番組確定表上の記述や表記の変遷、テクノロジーの変化を踏まえて秋田の台本製作に焦点を当てると、家庭でも聞くことができる内容に変え、さらにラジオにおいては漫才師だけではなく俳優を起用するなどして、制約と向き合いつつ、番組制作を行っていることが明らかになった。芸の表記の変動には、様々な制約的構造の存在と、それに向き合った一人の教育エリートの存在があることが判明した。

検討の結果については学会で報告し（学会報告④）、第 68 回関西社会学会大会奨励賞を受賞した。

（3）大衆と向き合う知識人の実態の解明

大衆娯楽の中でも演ずる内容の面で質が

批判されてきた漫才は、低級な演芸とみなされてきた。また、古典がなく、後発な芸として位置づけられてきた。しかし、定型がないがゆえに、つねに新しい話題、時事問題を取り込め、人々の素朴な感情を映しとることができる側面もあった。

本研究では、漫才作家として活躍した複数の作家の史資料を収集した。そのなかから、近代漫才の父と呼ばれ、作品も多い秋田実に焦点を当て、漫才に限定せずに彼の製作作品の展開を、内容や発表媒体、形態の面から検討した。

秋田の執筆活動は、旧制高校文化に位置づけられる文芸雑誌への参加にはじまるものの、大学在籍時には、大正デモクラシー後に学生たちに間で高まった社会主義運動への共感と連動して結成された雑誌への寄稿が見られ、内容も文体もプロレタリア文学と位置付けられるものであった。ただし、多くのプロレタリア文学とは対話形式が多用されている点で異なるなどの特徴がみられた。1930 年代以降になると、都市中産階級向け一般誌むけ雑誌に執筆し、社会批判の要素は残しつつも、対話形式でのみ表現する文体へと収斂する。同時に、耳のみで楽しめる、ラジオ用漫才台本を書き始めている。それは会話形式のみで物語が進行していた。そして、このラジオ用漫才台本の執筆は占領期も続いていった。

近代教育の普及は識字率の上昇を伴い、読書する人口を増加させたが、他方でその読書内容は学歴差があったことが読書研究によって指摘されている。秋田の作品発表の場は時代によって変化し、その形式もメディアやメディアの先にいるオーディエンスに合わせて変化していることが確認できる。各時代のメディア・テクノロジーの発展に合わせて見出された、必ずしも文字のみで思考するのではない人びとに向き合ったことが明らかになった。

この研究の成果は、秋田の活動の時期の戦前と占領期に分けて、学会で報告した（学会報告①②）

〈引用・参考文献〉

吉見俊哉、2016、『「文系学部廃止」の衝撃』集英社.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①後藤美緒, 2017 年度春季研究発表会ワークショップ報告,「ワークショップ 3　放送番組確定表から探る『上方』放送文化の成立――JOBK のメディア史研究に向けて」、『マス・コミュニケーション研究』92: 207-208, マス・コミュニケーション学会, 査読有.
https://doi.org/10.24460/mscom.92.0_207

〔学会発表〕（計 4 件）

①後藤美緒,「大衆とつくるラジオ番組――占領期における演芸番組「上方演芸会」を事例に」第 69 回関西社会学会,　2018 年 6 月 2 日.

②後藤美緒,「漫才作者という生き方――秋田 實の新人会体験」, 特別研究「なにわ大阪の『笑い』に関する調査と研究」研究会（招待）, 関西大学なにわ大阪研究センター主催,2018 年 2 月 20 日.

③後藤美緒【企画・司会】, 丸山友美【企画・討論者】ワークショップ 3「放送番組確定表から探る『上方』放送文化の成立――JOBK のメディア史研究にむけて――」マス・コミュニケーション学会春季研究発表会, 2017 年 6 月 18 日.

④後藤美緒,「ラジオに現れた『漫才』――戦前期 JOBK の演芸番組の構成に着目して」第 68 回関西社会学会,　2017 年 5 月 27 日. 第 68 回関西社会学会大会奨励賞.

〔図書〕（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

http://jobk-mediahistory.com/

６．研究組織

(1)研究代表者

後藤　美緒（GOTOH,Mio）
日本大学・文理学部・助手
研究者番号：60779932

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者

丸山　友美（MARUYAMA,Tomomi）
法政大学大学院・大学院生